

一段

むかし、おとこ、うめかうぶりして、平城の京、春日の里にしろよして、狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。このおとこ、かいまみてけり。おもほえず、古里にいはしたなくてありければ、心地まどひにけり。おとこの着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。そのおとこ、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず

となむ、をいつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思けん、

みちのくの忍もちずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける。

二段

むかし、おとこ有けり。ならの京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし、それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかゞ思ひけん、時は三月のついたち、雨そをふるに遣りける。

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

三段

むかし、おとこありけり。懸想じける女のもとに、ひじきもといふ物をやるとて、

思ひあらば葎の宿に寝もしなんひじきものには袖をしつゝも

二条の後のまだ帝にも仕うまつりたまはで、たゞ人にておはしましける時のこと也。

四段

むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人有けり。それを本意にはあらで心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、猶憂しと思ひつゝなんありける。又の年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひて行きて、立ちてみ、ゐてみ見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思いでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明るるに、泣く泣く帰りにけり。

五段

むかし、おとこ有けり。東の五条わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、童べの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、たびかさなりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとくに人をすへてまもらせければ、いけどもえ逢はで帰りけり。さてよめる。

人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななん

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじゆるしてけり。

六段

むかし、おとこありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率ていきければ、草の上をきたりける露を、「かれは何ぞ」となんおとこに問ひける。ゆくさき多く夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥にをし入れて、おとこ、弓胡籥（ゆみやなぐひ）を負ひて戸口に居り、はや夜も明けなんと思つゝゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさはぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへて消えなましものを

これは、二条の後のいとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下らうにて内へまいりたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それを、かく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のたゞにおはしける時とや。

七段

むかし、おとこありけり。京にありわびて、あづまにいきけるに、伊勢、おはりのあはひの海づらを行くに、浪のいと白く立つを見て、

いとゞしく過ぎゆくかたの恋しきにうら山しくもかへる浪かな

となむよめりける。

八段

むかし、おとこ有けり。京や住み憂かりけん、あづまの方に行きて住み所求むとて、友とする人ひとりふたりして行きけり。信濃の国、浅間の嶽にけぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽にたつ煙をちこち人の見やはとがめぬ

九段

(三河国)

むかし、おとこありけり。そのおとこ、身をえうなき物に思なして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげに下りゐて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

唐衣きつゝなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思

とよめりければ、人、乾飯のうへに してほとびにけり。

(河国)

行き行きて、河の国にいたりぬ。の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗うきに、つたかえではり、物心ぼそく、すぐろなるめを見ることと思ふに、行 あひたり。「かゝる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

河なる の山べのうつゝにも にも人にあはぬなりけり

の山を見れば、五月のつごもりに、いと白う降りり。

時知らぬ山は の いつとてかの まだらに の降るらん

その山は、こゝにたとへば、 の山を二十ばかり ねあげたらんほどして、なりは のやうになんありける。

(すみだ河)

猶行き行きて、蔵の国と下の国とのに、いと大きな河あり、それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて思ひやれば、限りなくとをくも来にけるかなとわびあへるに、守、「はやにれ。日も暮れぬ」といふに、りて らんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにもあらず。さるおりしも、白きのとき、の大ききなる、水のうへに びつゝ をくふ。京には見えぬ なれば、みな人見知らず。守に問ひければ、「これなん宮」といふを聞きて、

にし負はばいぎ 問はむ宮こ わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、こぞりて泣きにけり。

十段

むかし、おとこ、蔵の国までまどひありきけり。さて、その国にある女をよばひけり。はこと人にあはせむといひけるを、なんあてなる人に心つけたりける。はなおびとにて、なんなりける。さてなんあてなる人と思ひける。このむこがねによみてをこせたりける。住む所なむ人間の、みよし野の里なりける。

みよし野のたのむの もひたふるに がかたにぞよると鳴くなる

むこがね、 し、

わが方によると鳴くなるみよし野のたのむの をいつか れん

となむ。人の国にても、猶かゝることなんやまさりける。

十一段

昔、おとこ、あづまへ行きけるに、友だちどもに、道よりいひをこせける。

るなよほどは ゐになりぬとも ゆく月のめぐり逢ふまで

十二段

むかし、おとこ有けり。人のむすめをぬすみて、蔵野へ率て行くほどに、ぬす人なりければ、人の守にからめられにけり。女をば草むらのなかにをきて、げにけり。道来る人、「この野はぬす人あなり」とて、つけむとす。女、わびて、

蔵野は 日はな きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

十三段

昔、蔵なるおとこ、京なる女のもとに、「聞ゆれば づかし、聞えねば し」と書いて、上書に、「蔵」と書いてをこせてのち、をともせずなりにければ、京より女、

蔵 さすがにかけて むには問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、へがたき心地しける。

問へばいふ問はねば む 蔵 かゝるおりにや人は ぬらん

十四段

むかし、おとこ、みちの国にすゞろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼ

えけん、せちに思へる心なんありける。さて、かの女、

に恋に ならずは にぞなるべかりける玉の ばかり

女、
歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけん、いきて寝にけり。夜深く出でにければ、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、おとこ、京へなんまかるとて、

のあねはの の人ならば のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

十五段

むかし、みちの国にて、なでうことなき人の に通ひけるに、あやしうさやうにてあるべき女とも
あらず見えければ、

しのぶ山忍びて通ふ道も 人の心のおくも見るべく

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさかなきえびす心を見ては、いかゞはせんは。

十六段

むかし、の有 といふ人有けり。三世の帝につかうまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり
時うつりにければ、世の の人のこともあらず。人がらは、心うつくしくあてはかなることを みて、
こと人にも似ず。 しく経ても、猶昔よかりし時の心ながら、世の のことも知らず。年ごろあひ
れたる 、やうやう 離れて、つゐに になりて、 のさきだちてなりたる所へ行くを、おとこ、ま
ことにむつまじきことこそなかりけれ、 はと行くを、いとあはれと思けれど、 しければ、するわ
ざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかう はとてまか
るを、何 もいさゝかなることもえせで遣はすこと」と書きて、おくに、

手を りてあひ見し をかぞふればとおといひつゝ四つは経にけり

かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜の物までをくりてよめる。

年だにもとおとて四つは経にけるをいくたび をたのみきぬらん

かくいひやりたりければ、

これやこのあまの 衣むべしこそ がみけしとたてまつりけれ
よろこびにたへで、又、

や来る露やまがふと思ふまであるは の降るにぞ有ける

十七段

年ごろをとづれざりける人の、 のさかりに見に來たりければ、あるじ、

あだなりと にこそたてれ 花年にまれなる人も ちけり

し、

けふ来ずはあすは とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

十八段

むかし、なま心ある女ありけり。おとこ、 う有けり。女、歌よむ人なりければ、心見むとて、
の花のうつろへるを りて、おとこのもとへやる。

にほふはいづら白 の もとをゝに降るかとも見ゆ

おとこ、知らずよみによみける。

にほふがうへの白 はおりける人の袖かとぞも見ゆ

十九段

昔、おとこ、宮仕へしける女の方に、御 なりける人をあひ知りたりける、ほどもなくかれにけり。
じどころなれば、女の には見ゆる物から、おとこにはある物かとも思たらず。女、

のよそにも人のなりゆくかさすがに には見ゆる物から

とよめりければ、おとこ、 し、

のよそにのみして経ることはわがある山の はやみ也

とよめりけるは、又おとこある人となんいひける。

二十段

むかし、おとこ、大 にある女を見て、よばひてあひにけり。さて、ほど経て、宮仕へする人なり
ければ、帰ってくる道に、三月ばかりに、かえでのみぢのいとおもしろきを りて、女のもとに道よ

りいひやる。

がためたおれる　は春ながらかくこそ　のもみぢしにけれ
とてやりたりければ、　は京に來着きてなん　てきたりける。

いつの間にうつるふ　のつきぬらん　が里には春なかるらし

二十一 段

むかし、おとこ女、いとかしこく思ひかはして、　心なかりけり。さるをいかなる　かありけむ、
いさゝかなることにつけて、世　を憂しと思ひて、出でて去なんと思ひて、かゝる歌をなんよみて、
物に書きつけける。

出でて去なば心　しといひやせん世のありさまを人は知らねば

とよみをきて、出でて去にけり。この女かく書きをきたるを、　しう、心をくへきこともおぼえぬを、
何によりてかかゝらむと、いといたう泣きて、いづかたに求めゆかむと、門に出でて、と見かう見見
けれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、かへり入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我や住まひし

といひてながめをり。

人はいさ思ひやすらん玉かづら　にのみいとゞ見えつゝ

この女いと　しくありて、　じわびてにやありけん、いひをこせたる。

はとて　るゝ草のたねをだに人の心にまかせずも

し、

草　ふとだに聞く物ならば思けりとは知りもしなまし

又、ありしより　にいひかはして、おとこ、

わする　と思心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき

し、

に立ちゐる　のあともなく身のはかなくもなりにける

とはいひけれど、をのが世 になりければ、うとくなりけり。

二十二段

むかし、はかなくて えにける、猶や れざりけん、女のもとより、

憂きながら人をばえしも れねばかつ みつゝ猶ぞ恋しき

といへりければ、「さればよ」といひて、おとこ、

あひ見ては心ひとつをかは の水の れて えじとぞ思

とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきのことどもなどいひて、

の夜の 夜を一夜になすらへて八 夜し寝ばやあく時のあらん

し、

の夜の 夜を一夜になせりともことば りてとりや鳴きなん

いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

二十三段

むかし、 わたらひしける人の ども、 のもとに出でてあそびけるを、大人になりければ、
おとこも女も、 ぢかはしてありけれど、おとこはこの女をこそ得めと思ふ、女はこのおとこをと思
ひつゝ、 のあはすれども、聞かでなんありける。さて、この のおとこのもとよりかくなん。

つの にかけしまろがたけ過ぎにけらしな 見ざるまに

女、 し、

くらべこし も すぎぬ ならずして誰があぐべき

などいひいひて、 つゐに本意のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、 なくたよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらんや
はとて、河内の国、 の に、いきかよふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女、 しと思
へるけしきもなくて、出しやりければ、おとこ、 心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて、
の にかくれゐて、河内へいぬる に見れば、この女、いとよう じて、うちながめて、

けば つ白 たつた山夜 にや がひとり ゆらん

とよみけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

まれまれかの に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、はうちとけて、手づからいゝがひとりて、 のうつわ物に りけるを見て、心うがりていかずなりにけり。さりければ、かの女、大 の方を見やりて、

があたり見つゝを居らん 山 なかくしそ雨は降るとも

といひて見いだすに、からうじて、大 人来むといへり。よろこびて つに、たびたび過ぎぬれば、

来むといひし夜ごとに過ぎぬれば まぬ物の恋ひつゝぞふる

といひけれど、おとこ住まずなりにけり。

二十四段

むかし、おとこ、 に住みけり。おとこ、宮仕へしにとて、 れおしみてゆきにけるまゝに、三年来ざりければ、 ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、 逢はむとちぎりたりけるに、このおとこ来たりけり。「この戸あけたまへ」とたゝきけれど、あけで、歌をなんよみて出したりける。

あらたまの年の三年を ちわびてたゞ こそにあまくらすれ

といひ出したりければ、

弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ

といひて、去なむとしければ、女

弓 けど かねど昔より心は によりにし物を

といひけれど、おとこかへりにけり。女、いとかなしくて、 にたちてをひゆけど、えをいつかで、水にある所に しにけり。そこなりける に、およびの して書きつけける。

あひ思はで離れぬる人をとゞめかねわが身は ぞ消えはてぬめる

と書きて、そこにいたづらになりにけり。

二十五段

むかし、おとこ有けり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。
の野に わけし の袖よりも逢はで寝る夜ぞひちまさりける
みなる女、 し、

見るめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る

二十六段

むかし、おとこ、五条わたりなりける女をえ得ずなりにけることと、わびたりける、人の ごとに、
思ほえず袖にみなとのさはぐ もろこし の りし に

二十七段

昔、おとこ、女のもとに一夜いきて、又も行かずなりにければ、女の、手 ふ所に、ぬきす
をうち遣りて、たらひのかげに見えけるを、みづから、

我^{ばかり} 物思人は又もあらじと思へば水の下にも有けり

とよむを、来ざりけるおとこ立ち聞きて、

水口に我や見ゆらんかはづさへ水の下にて になく

二十八段

昔、 みなりける女、出でて去にければ、
などてかくあふごかたみになりにけん水もらさじと びしものを

二十九段

むかし、春宮の女御の御方の花の に、 しあづけられたりけるに、

花に かぬ きはいつもせしかども 日のこよひに似る時はなし

三十段

むかし、おとこ、はつかなりける女のもとに、

逢ふことは玉の おもほえてつらき心のながく見ゆらん

三十一段

昔、宮の内にて、ある御 の を りけるに、何のあたにか思けん、「よしや草 よ、ならん

さが見む」といふ。おとこ、

もなき人をうけへば 草をのがうへにぞ ふといふなる
といふを、ねたむ女もありけり。

三十二段

むかし、物いひける女に、年ごろありて、
いにしへのしづのをだまき りかへし昔を になすよしも
といへりけれど、何とも思はずやありけん。

三十三段

むかし、おとこ、 国、 (むぼら)の に通ひける女、このたび行きては、又は来じと思へる
けしきなれば、おとこ、

より ちくる のいやましに に心を思ます

し、

こもり に思ふ心をいかでかは さすさほのさして知るべき
ゐなか人の にては、よしやあしや。

三十四段

むかし、おとこ、つれなかりける人のもとに、

いえばえにいはねば にさはがれて心ひとつに くころ

おもなくて言へるなるべし。

三十五段

むかし、心にもあらで えたる人のもとに、

玉の をあはおによりて べれば えての も逢はむとぞ思

三十六段

昔、「れぬるなめり」と問ひ言しける女のもとに、

せばみ まで へる玉かづら えむと人にわが思はなくに

三十七段

昔、おとこ、 みなりける女に逢へりけり。うしろめたくや思けん、

我ならで下 とくな の かげ たぬ花にはありとも

し、

ふたりして びし をひとりしてあひ見るまでは かじとぞ思

三十八段

むかし、 の有 がりいきたるに、 きてをそく来けるに、よみてやりける。

により思ならひぬ世 の人はこれをや恋といふらん

し、

ならばねば世の人ごとに何をかも恋とはいふと問ひし我しも

三十九段

むかし、西の帝と す帝おはしましけり。その帝の 女、 と すいまそがりけり。その 女
うせて、御の夜、その宮の なりけるおとこ、御 見むとて、女 にあひりて出でたりけり。
いと しょう率て出でたてまつらず。うち泣きてやみぬべかりける間に、 の下の み、 のとい
ふ人、これも物見るに、この を女 と見て、 り来てとかなまめく間に、かの、 をとりて女
の に入れたりけるを、 なりける人、この のともす にや見ゆらん、ともし消ちなむずるとて、
れるおとこのよめる。

出でていなば限りなるべみともし消ち年経ぬるかと泣く を聞け

かの、 し、

いとあはれ泣くぞ聞ゆるともし消ち消ゆる物とも我は知らずな

の下の みの歌にては猶ぞありける。

は が 也。 女の本意なし。

四十段

昔、若きおとこ、 しょうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする ありて、思ひもぞつくとして、この

女をほかへをひやらむとす。さこそいへ、まだをいやらず。人のなれば、まだ心いきおひなかりければ、とゞむるいきおひなし。女もしければ、すまふなし。さる間に、思ひはいやまさりにまさる。にはかにこの女をおひうつ。おとこ、のをながせども、とゞむるよしなし。率て出でて去ぬ。おとこ、泣く泣くよめる。

出でていなば誰かのからんありしにまさる日はしも

とよみてえ入りにけり。あはてにけり。猶思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、にえ入りにければ、まどひてたてけり。日の入にえ入りて、又の日の時ばかりになんからうじていき出でたりける。昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。の、まさにしなむや。

四十一段

昔、女はらから二人ありけり。一人はいやしきおとこのしき、一人はあてなるおとこもたりけり。いやしきおとこもたる、十二月のつごもりに、をひて、手づからりけり。心ぎしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、のをりりてけり。せむ方もなくて、たゞ泣きに泣きけり。これを、かのあてなるおとこ聞きて、いと心しかりければ、いとよらなるのを見出でてやるとて、

紫のこき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

蔵野の心なるべし。

四十二段

昔、おとこ、みと知る知る、女をあひいへりけり。されどにくはたあらざりけり。しばしば行きけれど、猶いとうしろめたく、さりとて、行かではたえあるまじかりけり。なをはたえあらざりけるなりければ、二日三日ることありて、え行かでかくなん、

出でて来しだににまだらじを誰が通ひ路とはなるらん

ものはしきによめるなりけり。

四十三段

むかし、のとすおはしましけり。その、女をおぼしめして、いとかしこうみつかうたまひけるを、人なまめきてありけるを、我のみと思ひけるを、又人聞きつけて、文やる。ほととぎすのかたをかきて、

ほととぎすがなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ものから

といへり。この女、けしきをとりて、

のみたつしでのたおさは ぞなく あまたとうとまれぬれば

時は五月になんありける。おとこ、し、

おほきしでのたをさは猶たのむわが住むりに し えずは

四十四段

むかし、へゆく人に、のはなむけせむとて、びて、うとき人にしあらざりければ、い
さゝせて、女の かづけんとす。あるじのおとこ、歌よみて の に ひつけさす。

出でてゆく がためにとぬぎつれば我さへもなくなりぬべきかな

この歌はあるがなかにおもしろければ、心とらめてよます、 にあぢはひて。

四十五段

むかし、おとこ有けり。人のむすめのかしづく、いかでこのおとこに物いはむと思けり。うち出で
むことかたくやありけむ、物 みになりて ぬべき時に、「かくこそ思しか」といひけるを、聞き
つけて、泣く泣く げたりければ、まどひ来たりけれど、にければ、つれづれとこもりをりけり。
時は六月のつごもり、いと きころをひに、夜ゐは びをりて、夜ふけて、やゝ しき きけり。
たかく びあがる。このおとこ、見 せりて、

ゆく のうへまで去ぬべくは ふくと に げこせ

暮れがたき の日ぐらしながむればそのこととなく物ぞ しき

四十六段

むかし、おとこ、いとうるはしき友ありけり。時さらずあひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、
いとあはれと思ひて、 れにけり。月日経てをこせたる文に、「あさましく対 せで月日の経にける
こと。 れやし にけんと、いたく思ひわびてなむ。世 の人の心は、 かるれば れぬべき物に
こそあめれ」とていへりければ、よみてやる。

かるとも思ほえなくに らるゝ時しなれば にたつ

四十七段

むかし、おとこ、ねんごろにいかでと思女有けり。されど、このおとこをあだなりと聞きて、つれ
なさのみまさりつゝいへる。

大 の く手あまたになりぬれば思へどえこそ まざりけれ

し、おとこ、

大とにこそたてれてもつゐにるはありといふ物を

四十八段

昔、おとこ有けり。のはなむけせんとて人をちけるに、来ざりければ、

ぞ知るしき物と人たむ里をば離れずふべかりけり

四十九段

むかし、おとこ、のいとおかしげなりけるを見をりて、

うら若み寝よげに見ゆる若草をひとのばむことをしぞ思

と聞えけり。し、

草のなどめづらしき言のぞうらなく物を思ける

五十段

昔、おとこ有けり。むる人をみて、

のを十づゝ十はぬとも思はぬ人をおもふものかは

といへりければ、

露は消えのこりてもありぬべし誰かこの世をみはつべき

又、おとこ、

に去年のはらずともあなみがた人の心は

又、女、し、

行く水にかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

又、おとこ、

行く水と過ぐるよはひとり花といづれててふことを聞くらん

あだくらべかたみにしけるおとこ女の、忍びありきしけることなるべし。

五十一段

昔、おとこ、人の うへけるに、

へし へば なき時や咲かざらん花こそ らめ さへ れめや

五十二段

むかし、おとこありけり。人のもとよりかざり をこせたりける に、

あやめ り は にぞまどひける我は野に出でてかるぞわびしき

とて、 をなむやりける。

五十三段

むかし、おとこ、逢ひがたき女にあひて、物語などするほどに、 の鳴きければ、

いかでかは のなく 人知れず思ふ心はまだ夜深きに

五十四段

昔、おとこ、つれなかりける女にいひやりける。

行やらぬ 地をたのむ には つ なる露やをくらん

五十五段

むかし、おとこ、思かけたる女の、え得まじうなりての世に、

思はずはありもすらめど のはのをりふしごとく まるゝ

五十六段

むかし、おとこ、 して思ひ、起きて思ひ、思ひあまりて、

わが袖は草の にあらねども暮るれば露の宿りなりけり

五十七段

昔、おとこ、人知れぬ物思ひけり。つれなき人のもとに、

恋ひわびぬ海人の る に宿るてふ我から身をもくだきつる

五十八段

むかし、心つきて みなるおとこ、 といふ所に家づくりてをりけり。そのの なりける宮ば

らに、こともなき女どもの、なりければ、らんとて、このおとこのあるを見て、「いみじのすき物のしわざや」とて、りて入り来ければ、このおとこ、げて奥にかくれにければ、女、

れにけりあはれ 世の宿なれや住みけんひとをとづれもせぬ

といひて、この宮にり来ぬてありければ、このおとこ、

葎ひて れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり

とてなむ、いだしたりける。この女ども、「ひろはむ」といひければ、

うちわびて ひろふと聞かませば我も にゆかましものを

五十九段

むかし、おとこ、京をいかゞ思ひけん、東山に住まむと思ひ入りて、

住みわびぬ はかぎり山里に身をかくすべき宿求めてん

かくて、物いたくみて、に入りたりければ、おもてに水そゝきなどして、いき出でて、

わがうへに露ぞをくなるの河門わたるのしづくか

となむいひて、いき出でたりける。

六十段

むかし、おとこ有けり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどに家、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。このおとこ、のにていきけるに、ある国の(しぞう)の人のにてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずはまじ」といひければ、かはらけとりて出したりけるに、さかななりけるをとりて、

五月まつ花たちばなのをかげばむかしの人の袖のぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、になりて、山に入りてぞありける。

六十一段

昔、おとこ、紫まで行きたりけるに、「これはむといふすき物」と、のうちなる人のいひけるを聞きて、

河をらむ人のいかでかはになるてふことのなからん

女、し、

にしおはばあだにぞあるべきたはれ 浪のぬれぎぬ着るといふなり

六十二段

むかし、年ごろをとづれざりける女、心かしくやあらざりけん、はかなき人の につきて、人の国なりける人につかはれて、もと見し人の に出で来て、物食はせなどしけり。夜さり、「このありつる人たまへ」とあるじにいひければ、をこせたりけり。おとこ、「我をば知らずや」とて、

いにしへのにほひはいづら 花こけるからともなりにける

といふを、いと づかしと思て、いらへもせでゐたるを、「などいらへもせぬ」といへば、「のこぼるゝに、 も見えず、物もいはれず」といふ。

これやこの我にあふみをのがれつゝ年月経れどまさり なき

といひて、衣 ぎてとらせけれど、 てて げにけり。いづち去ぬらんとも知らず。

六十三段

むかし、世心つける女、いかで心 あらむおとこにあひ得てしがなと思へど、言ひ出でむもたよりなさに、まことならぬ 語りをす。三人を びて 語りけり。二人の は、 なくいらへて みぬ。三郎なりける なん、「よき御男ぞ出でこむ」とあはするに、この女、 いとよし。こと人はいとなし、いかでこの 五 に逢はせてし と思心あり。狩しありきけるに行きあひて、道にての口をとりて、「かうかうなむ思ふ」といひければ、あはれがりて、来て寝にけり。さてのち、おとこ見えざりければ、女、おとこの家に行きてかいまみけるを、おとこ、ほのかに見て、

年に一年たらぬつくも 我を恋ふらし に見ゆ

とて出でたつ を見て、むばらからたちにかゝりて、家に来てうちふせり。おとこ、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、女、 きて寝とて、

さむしろに衣かたしきこよひもや恋しき人にあはでのみ寝む

とよみけるを、おとこあはれと思て、その夜は寝にけり。世 の として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬ物を、この人は、思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なんありける。

六十四段

昔、おとこ、みそかに語らふわざもせざりければ、いづくなりけん、あやしきによめる。

にわが身をなさば玉すだれひま求めつゝ入るべきものを

し、

とりとめぬ にはありとも玉すだれ誰が さばかひま求むべき

六十五段

むかし、おほやけ思(おぼ)して うたまふ女の、ゆるされたるありけり。大御 所とていますかりけるいとこなりけり。上にさぶらひける なりけるおとこの、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。おとこ、女がた されたりければ、女のある所に来て ひをりければ、女、「いとかたはなり。身もほろびなん。かくなせそ」といひければ、

思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

といひて、 下りたまへれば、 の、この御 には人の見るをも知らでのぼりみければ、この女、思ひわびて里へ行く。されば、何のよきことと思て、いき通ひければ、みな人聞きて ひけり。つとめて の見るに、 はとりて奥に げ入れてのぼりぬ。かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つゝにほろびぬべしとて、このおとこ、「いかにせん。わがかゝる心やめたまへ」と 神にも けれど、いやまさりにのみおぼえつゝ、猶わりなく恋しうのみおぼえければ、 よびて、恋せじといふ の してなむ行きける。へけるまゝに、いとどかなしきこと まさりて、ありしよりけに恋しくのみおぼえければ、

恋せじと御手 河にせし 神はうけずもなりにけるかな

といひてなん去にける。

この帝は かたちよくおはしまして、 の御 を、御心にいれて、御 はいとたうとくて たまふを聞きて、女はいたう泣きけり。「かゝる に仕うまつらで、宿世つたなく しきこと、このおとこにほだされて」とてなん泣きける。かゝるほどに、帝聞こし しつけて、このおとこをば しつかはしてければ、この女のいとこの御 所、女をばまかでさせて、蔵に めてしおりたまふければ、蔵にりて泣く。

海人の る にすむ の我からと をこそ泣かめ世をばうらみじ

と泣きをれば、このおとこ、人の国より夜ごとに来つゝ、 をいとおもしろく きて、 はおかしうてぞあはれにうたひける。かゝれば、この女は蔵に りながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなんありける。

さりともと思 こそ しけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひをり。おとこは、女し逢はねば、かくし きつゝ、人の国に きてかくうたふ。

いたづらに行ては来ぬる物ゆへに見まくほしさに 是れつゝ
水のおの御時なるべし。大御 所も の后也。五条の后とも。

六十六段

むかし、おとこ、 の国にしる所ありけるに、あにおとゝ友だちひきゐて、 の方にいきけり。
を見れば、 どものあるを見て、

をけさこそみつの ごとにこれやこの世をうみる

これをあはれがりて、人 帰りにけり。

六十七段

むかし、おとこ、 しに、思ふどちかいつらねて、 の国へ二月 にいきけり。河内の国、
の山を見れば、 りみ れみ、たちある やまず。 より りて、 れたり。 いと白う木のす
に降りたり。それを見て、かの行く人のなかに、たゞ一人よみける。

きのうけふ のたちまひ ろふは花の を憂しとなりけり

六十八段

昔、おとこ、 の国へいきけり。住 の、住 の里、住 の をゆくに、いとおもしろければ、
おりあつゝ行く。ある人、「住 の をよめ」といふ。

なきて の花さく はあれど春の海 にすみよしの

とよめりければ、みな人 よまずなりにけり。

六十九段

むかし、おとこ有けり。そのおとこ、伊勢の国に狩の にいきけるに、かの伊勢の 宮なりける人
の、「の よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、 の言なりければ、いとねむご
ろにいたはりけり。 には狩にいだしたててやり、 さりは帰りつゝ、そこに来させけり。かくてね
むごろにいたつきけり。二日といふ夜、おとこ、「来て逢はむ」といふ。女もはた、いと逢はじと
も思へらず。されど、人 しげければ、え逢はず。 ざねとある人なれば、とをくも宿さず。女の
くありければ、女、人をしづめて、 一つ に、おとこのもとに来たりけり。おとこはた、寝られ
ざりければ、 のかたを見出だして せるに、月のおぼろなるに、 さき童を に立てて、人立てり。
おとこ、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、 一つより 三つまであるに、まだ何ごとも語
らはぬに、帰りにけり。おとこ、いとかなしくて、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わ
が人をやるべきにあらねば、いと心もとなくて ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもと
より、ことばはなくて、

や来し我や行きけむおもほえず か か寝てかさめてか

おとこ、いといたう泣きてよめる。

かきくらす心の にまどひにき うつゝとはこよひ めよ

とよみてやりて、狩に出でぬ。野にありけど、心は にて、こよひだに人しづめて、いとく逢はむ
と思に、国の守、 宮の守かけたる、狩の ありと聞きて、夜ひと夜 みしければ、もはらあひご
ともえせで、明けばおはりの国へ立ちなむとすれば、男も人知れず の を せど、え逢はず。夜や
うやう明けなむとするほどに、女がたよりいだす の に、歌を書きて出したり。とりて見れば、

かち人の れど れぬえにしあれば

と書きて、 はなし。その の に、 の して、歌の を書きつぐ。

又逢 の関は えなん

とて、明くればおはりの国へ えにけり。

宮は水のおの御時、文 の御むすめ、 の の 。

七十段

むかし、おとこ、狩の より帰り来けるに、大 のわたりに宿りて、 宮のわらはべにいひかけ
る。

みるめかる方やいづこそさほさして我に へよあまの

七十一段

昔、おとこ、伊勢の 宮に、内の御 にてまいれりければ、かの宮にすぎごと言ひける女、 に
て、

ちはやぶる神の も えぬべし大宮人の見まくほしさに

おとこ、

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

七十二段

むかし、おとこ、伊勢の国なりける女、又え逢はで、 の国へ行くとて、いみぢう みければ、女、

大のはつらくもあらなくにうらみてのみもかへるなみ

七十三段

むかし、そこにはありと聞けど、消をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。

には見て手にはとられぬ月のうちののごときにぞありける

七十四段

むかし、おとこ、女をいたうみて、

ふみなる山にあらねども逢はぬ日おほく恋ひわたる

七十五段

昔、おとこ、「伊勢の国に率て行きてあらむ」といひければ、女、

大のにふてふみるからに心はなぎぬ語らはねども

といひて、ましてつれなかりければ、おとこ、

袖ぬれて海人のりほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやす

女、

間よりふるみるめしつれなくはちかひもありなん

又、おとこ、

にぞぬれつゝしぼる世の人のつらき心は袖のしづくか

世に逢ふことかたき女になん。

七十六段

むかし、二条の後の、まだ春宮の御所とける時、神にまうでけるに、にさぶらひける、人のたまはるついでに、御よりたまはりて、よみてりける。

大やの山もけふこそは神世のことも思出づらめ

とて、心にもかなしとや思ひけん、いかゞ思ひけん、知らずかし。

七十七段

むかし、の帝とす帝おはしましけり。その時の女御、多とすみまそがりけり。それ
 せたまひて、にてみわざしけり。人げものりけり。りあつめたる物、あり。
 そこばくのげものを木のにつけて、のにたてたれば、山もさらにのうごき出でたるや
 うになん見えける。それを、大にいまそがりけるの行とすいまそがりて、のるほど
 に、歌よむ人をしめて、日のみわざをにて、春の心ばえある歌らせたまふ。のな
 りける、はたがひながらよみける。

山のみなうつりてけふにあふは春のれをとふとなるべし

とよみたりけるを、いま見れば、よくもあらざりけり。そのかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。

七十八段

むかし、多とす女御おはしましけり。せて七七日のみわざ、にてしけり。大
 の行といふ人いまそがりけり。そのみわざにまうでたまひて、かへさに、山の
 おはします。その山の宮に、し、水らせなどして、おもしろくられたるにまうでたまうて、
 「年ごろよそには仕うまつれど、くはいまだ仕うまつらず。こよひはこゝにさぶらはむ」とたま
 ふ。よろこびたまふて、夜の御のまうけさせ。さるに、かの大、出でてたばかりたまふ
 やう、「宮仕へのはじめに、たぐなをやはあるべき。三条の大御せし時、の国の里のにあり
 ける、いとおもしろきれりき。大御ののちれりしかば、ある人の御ののにすへたり
 しを、み也、このをらん」とのたまひて、御身、人してりにつかはす。いくばく
 もなくて来ぬ。この、きしよりは見るはまされり。これをたぐにらばすぐるなるべしとて、
 人に歌よませたまふ。のなりける人のをなむ、あおきをきざみて、のかたに、この歌
 をつけてりける。

あかねどもにぞかふる見えぬ心を見せむよしのなければ
 となむよめりける。

七十九段

むかし、のなかにうまれへりけり。御に、人歌よみけり。御がたなりけるの
 よめる。

わが門にあるをうへつればたれかれざるべき

これはの、時の人、のとなんいひける、兄の納言行平のむすめのなり。

八十段

むかし、おとろへたる家に、の花へたる人ありけり。三月のつごもりに、その日雨そほふるに、

人のもとへおりて　らすとてよめる。

れつゝぞしみておりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

八十一段

むかし、の大臣いまそがりけり。河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろくりて
住み　ひけり。神　月のつごもりがた、　の花うつろひざかりなるに、　の　に見ゆるおり、
たちおはしまさせて、夜ひと夜　みし　びて、夜あけてゆくほどに、この　のおもしろきをほ
むる歌よむ。そこにありけるかたゐをきな、板敷の下にはひありきて、人にみなよませはててよめる。

　　いつか来にけむ　なぎに　する　はこゝに　らなん

となむよみけるは。みちの国にいきたりけるに、あやしくおもしろき所　多かりけり。わがみかど六
十　国の　に、　といふ所に似たるところなかりけり。さればなむ、かの　さらにこゝをめでて、
にいつか来にけむとよめりける。

八十二段

むかし、の　と　す　おはしましけり。山　のあなたに、水　といふ所に宮ありけり。
年ごとの　の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、の　なりける人を、に率
ておはしましけり。時世へて　しくなりにければ、その人の　れにけり。狩はねむごろにもせで、
をのみ　みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する　野の　の家、その　の　ことにおもしろ
し。その木のもとにおりて、　を　りてかざしにさして、上　下みな歌よみけり。　なりける人
のよめる。

世　に　えて　のなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。又人の歌、

ればこそいとゞ　はめでたけれうき世になにか　しかるべき

とて、その木のもとに立ちてかへるに、日ぐれになりぬ。御　なる人、　をもたせて野より出で来た
り。この　を　みてむとて、よき所を求めゆくに、　の河といふ所にいたりぬ。　に　、大御
まいる。　ののたまひける、「野を狩りて、　の河のほとりに　るを　にて、歌よみてさか月は
させ」とのたまうければ、かの　よみて　りける。

狩り暮らし　つ女に宿からむ　の河　に我は来にけり

、歌を　じたまうて、　しえしたまはず。　の有　御　に仕うまつれり、それが　し、

一年にひとたび来ます　まてば宿かす人もあらじとぞ思

帰りて宮に入らせぬ。夜ふくるまでみ物語して、あるじの、ひて入りひなむとす。
十一日の月もれなむとすれば、かののよめる。

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のにげて入れずもあらなん

にかはりたてまつりて、の有、

をしなべてもたひらになりななむ山のなくは月も入らじを

八十三段

むかし、水にかよひし、の、の狩しにおはしますに、なる仕うまつれり。
日ごろ経て、宮に帰りたまうけり。御をくりして、とく去なんと思ふに、大御ひ、はむとて、
つかはさざりけり。この心もとながりて、

とて草ひきぶこともせじの夜とだにまれなくに

とよみける。時は三月のつごもりなりけり。、大らで明かしてけり。

かくしつゝまうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、御おろしたまうてけり。正月におがみたて
まつらむとて、野にまうでたるに、の山のなれば、いとし。しめて御にまうでておが
みたてまつるに、つれづれといと物がなしくておはしましければ、やゝしくさぶらひて、いにしへ
のことなど思ひ出で聞えけり。さてもひてしがなと思へど、どもありければ、えさぶらはで、
暮に帰るとて、

れてはかとぞ思思ひきやふみわけてを見むとは

とてなむ泣く泣く来にける。

八十四段

むかし、おとこ有けり。身はいやしなながら、なん宮なりける。その、といふ所に住みけ
り。は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつにさへありければ、
いとかなしうしひけり。さるに、十二月ばかりに、とみのこととて御ふみあり。おどろきて見れば、
歌あり。

ぬればさらぬれのありといへばいよいよ見まくほしきかな

かの、いたうち泣きてよめる。

世にさらぬれのなくももといのる人のため

八十五段

昔、おとこ有けり。童より仕うまつりける、御 おろしたまうてけり。正月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、にはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになん有ける。昔仕うまつりし人、なる、なる、あまたまいりりて、正月なれば だつとて、大御 たまひけり。こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず。みな人 ひて、「に降りこめられたり」といふを にて、歌ありけり。

思へども身をしわけねば 離れせぬ のつもるぞわが心なる

とよめりければ、 、いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり。

八十六段

昔、いと若きおとこ、若き女をあひ言へりけり。をのをの ありければ、つゝみていひさしてやみにけり。年ごろ経て、女のもとに、猶心ざし さむとや思けむ、おとこ、歌をよみてやれりけり。

までに れぬ人は世にもあらじをのがさまま年の経ぬれば

とてやみにけり。おとこも女も、あひ離れぬ宮仕へになん出でにける。

八十七段

むかし、おとこ、 の国、 の、 の里にしるよしして、いきて住みけり。むかしの歌に、

の の の いとまなみ の もさゝず来にけり

とよみけるぞ、この里をよみける。こゝをなむ の とはいひける。このおとこなま宮仕へしければ、それを りにて、 うの ども り来にけり。このおとこのこのかみも なりけり。その家の海のほとりに びありきて、「いざ、この山の上にあるといふ の 見にのぼらん」といひて、のぼりて見るに、その、物よりこと也。 さ二十、 さ五 なる のおもて、白 にを つゝめらんやうになむありける。さる の上に、わらうだの大きさして、さし出でたる あり。そのうへに りかゝる水は、 の大きさにてこぼれ づ。そこなる人にみな の歌よます。かの まづよむ。

わが世をばけふかあすかと つかひの の といづれ けん

あるじ、 によむ。

ぬき する人こそあるらし白玉のまなくも るか袖のせばきに

とよめりければ、かたへの人、 ふことにや有けん、この歌にめでてやみにけり。

帰りくる道とをくて、せにし宮内もちよしが家の来るに、日暮れぬ。やどりの方を見やれば、海人の多く見ゆるに、かのあるじのおとこよむ。

るゝ夜の か河の かもわが住むかたの海人のたくか

とよみて、家に帰り来ぬ。その夜の きて、浪いと し。つとめて、その家の女の ども出でて、海 の浪によせられたる ひて、い の内に て来ぬ。女がたより、その海 を にもりて、をおほひて出したる、 に書けり。

つ海のかざしにさすといはふ も がためにはおしまざりけり

人の歌にては、あまれりや、足らずや。

八十八段

昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども りて、月を見て、それがなかに一人、

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の となる物

八十九段

昔、いやしからぬおとこ、我よりはまさりたる人を思かけて、年経ける。

人知れず我恋ひ なばあぢきなくいづれの神になき おほせん

九十段

むかし、つれなき人をいかでと思わたりければ、あはれと思けん、「さらば、明日物 しにても」といへりけるを、限りなくうれしく、又うたがはしかりければ、おもしろかりける につけて、

花 日こそかくもにほふともあな みがた明日の夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

九十一段

むかし、月日のゆくをさへ くおとこ、三月つごもりがたに、

おしめども春のかぎりの 日の日の 暮にさへなりにける

九十二段

むかし、恋しきに来つゝ帰れど、女に消 をだにえせでよめる。

こぐ し いくそたび行きかへらん知る人もなみ

九十三段

むかし、おとこ、身はいやくして、いとになき人を思かけたりけり。すこし みぬべきさまにやありけん、 して思ひ、起きて思ひ、思わびてよめる。

あふなあふな思ひはすべしなぞへなく きいやしき しかりけり

昔も、かゝることは世のことはりにやありけん。

九十四段

むかし、おとこ有けり。いかゞありけむ、そのおとこ住まずなりにけり。 に男ありけれど、ある なりければ、こまかにこそあらねど、時 ものいひをこせけり。女がたに、 かく人なりければ、かきにやれりけるを、 のおとこの物すとて、一日二日をこせざりけり。かのおとこ、「いとつらくをのが聞ゆる をば、 まだ はねば、ことほりと思へど、猶人をば みつべき物になんありけるとて、 じてよみてやれりける。時は になんありける。

の夜は春日わするゝ物なれや に や まさるらん

となんよめりける。女、 し、

の ひとつの春にむかはめや も花もともにこそれ

九十五段

むかし、二条の后に仕うまつるおとこ有けり。女の仕うまつるを に見かはして、よばひわたりけり。「いかで物 しに對 して、おぼつかなく思つめたること、すこしはるかさん」といひければ、女、いとしのびて、物 しに逢ひにけり。物語などして、おとこ、

に恋はまさりぬ の河へだつる関をいまはやめてよ

この歌にめでて、逢ひにけり。

九十六段

むかし、おとこ有けり。女をとかくいふこと月日経にけり。 木にしあらねば、心 しとや思けん、やうやうあはれと思けり。そのころ、六月の ばかりなりければ、女、身に 一つ二つ出できにけり。女いひをこせたる、「はなにの心もなし。身に も一つ二つ出でたり。時もいと し。すこし き立ちなん時、かならず逢はむ」といへりけり。 まつころをひに、こゝかしこより、その人のもとへいなむずなりとて、口 出できにけり。さりければ、女の兄人、にはかに へに來たり。さればこの女、かえでの を はせて、歌をよみて、書きつけてをこせたり。

かけていひしながらもあらなくに木の 降りしくえにこそありけれ

と書きをきて、「かしこより人をこせば、これをやれ」とて去ぬ。さて、やがて、 つめに 日まで知らず。よくてやあらむ、あしくてやあらん、去にし所も知らず。かのおとこは、 の 手をうちてなむ ひをるなる、むくつけきこと。人の ひごとは、負ふ物にやあらむ、負はぬ物にやあらん、「いまこそは見め」とぞいふなる。

九十七段

むかし、堀河の大臣と すいまそがりけり。四十の 、九条の家にてせられける日、 なりける

花 り ひ れ いらくの来むといふなる道まがふがに

九十八段

昔、おほきおほいうちぎみと聞ゆるおはしけり。仕うまつるおとこ、九月 に、梅のつくり にをつけて るとて、

わがたのむ がためにとおる花は時しもわかぬ物にぞ有ける

とよみて りたりければ、いとかしこくおかしがり て、 に へりけり。

九十九段

むかし、 の ひをりの日、むかひに立てたりける に、女 の 下 よりほのかに見えければ、 なりけるおとこのよみてやりける。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく 日やながめ暮さん

は誰と知りにけり。

段

むかし、おとこ、 のはさまを りければ、あるやむごとなき人の御 より、 れ草を「忍ぶ草とやいふ」とて、出ださせたまへりければ、 はりて、

草 ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり もたのまん

一段

むかし、 なりける の行平といふありけり。その人の家によき ありと聞きて、うへにありける の といふをなむ、まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたりける。な さいある人にて、 に花をさせり。その花のなかに、あやしき の花ありけり。花のしなひ、三六 ばかりなむありける。それを にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじしたま

ふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しゐてよませければ、かくなん。

咲く花のしたに　るゝ人を多みありしにまさる　のかげかも

「などかくしもよむ」といひければ、「おほきおとゝの花の　りにみまそがりて、　のことにゆるを思ひてよめる」となんいひける。みな人、そしらずなりにけり。

二段

むかし、おとこ有けり。歌はよまざりけれど、世を思知りたりけり。あてなる女の、　になりて、世を思　んじて、京にもあらず、はるかなる山里に住みけり。もと　なりければ、よみてやりける。

そむくとて　には　らぬ物なれど世の憂きことぞよそになるてふ

となんいひやりける。　宮の宮也。

三段

むかし、おとこ有けり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。心あやまりやしたりけむ、　たちの　ひたまひける人をあひいへりけり。さて、

寝ぬる夜の　をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる

となんよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。

四段

むかし、ことなる　なくて、　になれる人有けり。かたちをやつしたれど、物やゆかしかりけむ、の　見に出でたりけるを、おとこ、歌よみてやる。

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよとも　まるゝ

これは　宮の物見たまひける　に、かく聞えたりければ、見さして帰り　にけりとなん。

五段

むかし、おとこ、「かくては　ぬべし」といひやりたりければ、女、

白露は消なば消なん消えずとて玉にぬくべき人もあらずを

といへりければ、いとなめしと思けれど、心ざしはいやまさりけり。

六段

昔、おとこ、 たちの し 所にまうでて、 河のほとりにて、
ちはやぶる神世もきかず 河からくれなゐに水くゝるとは

七段

むかし、あてなるおとこありけり。そのおとこのもとなりける人を、内 到有ける の 行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もおさおさしからず、ことばもいひ知らず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、 を書いて、かゝせてやりけり。めでまどひにけり。さて、おとこのよめる。

つれづれのながめにまさる 河袖のみひちて逢ふよしもなし

し、 の、おとこ、女にかはりて、

浅みこそ袖はひつらめ 河身さへながると聞かばたのまむ

といへりければ、おとこいいたうめでて、 まで、 きて文 に入れてありとなんいふなる。

おとこ、文をこせたり。得てのちの なりけり。「雨の降りぬべきになん見わづらひ。身さいはひあらば、この雨は降らじ」といへりければ、 の、おとこ、女にかはりてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞまされる

とよみてやれりければ、 も もとりあへで、しとゞに れてまどひ来にけり。

八段

むかし、女、人の心をうらみて、

けばとはに浪 す なれやわが衣手のかはく時なき

と の言ぐさにいひけるを、聞きおひけるおとこ、

夜あゝごとに のあまた鳴く には水こそまされ雨は降らねど

九段

むかし、おとこ、友だちの人を へるがもとにやりける。

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきに恋ひんとか見し

十段

むかし、おとこ、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「こよひ になん見えたまひつる」といへりければ、おとこ、

思ひあまり出でにし のあるならん夜深く見えば むすびせよ

十一段

昔、おとこ、やむごとなき女のもとに、 くなりけるをとぶらふやうにて、 いひやりける。

いにしへはありもやしけん ぞ知るまだ見ぬ人を恋ふるものとは

し、

下 のしるしとするも けなくにかたるがごとは恋ひずぞあるべき

又、 し、

恋しとはさらにもいはじ下 の けむを人はそれと知らなん

十二段

むかし、おとこ、ねむごろにいひ りける女の、ことざまなりにければ、

のあまの く煙 をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

十三段

昔、おとこ、やもめにてゐて、

ながからぬ のほどに るゝはいかに き心なるらん

十四段

むかし、 の帝、 河に行 したまひける時、 はさること似げなく思けれど、もどつきにけるなれば、大 の にてさぶらはせたまひける。 狩衣の 書きつけける。

さび人などがめそ狩衣けふばかりとぞ も鳴くなる

おほやけの御 あしかりけり。をのが を思けれど、若からぬ人は聞きおひけりとや。

十五段

むかし、みちの国にて、おとこ女すみけり。おとこ、「宮こへいなん」といふ。この女いとしうて、 のはなむけをだにせむとて、おきのゐて、 といふ所にて、 ませてよめる。

をきのゐて身を くよりも しきは宮こしまへの れなりけり

十六段

むかし、おとこ、すゞろにみちの国までまどひいにけり。京に、思ふ人にいひやる。

浪間より見ゆる の びさし しくなりぬ にあひ見で

「何も、みなよくなりにつけり」となんいひやりける。

十七段

むかし、帝、住 に行 したまひけり。

我見ても しくなりぬ住 の の いく 経ぬらん

御神、 して、

むつましと は白浪 の しき世よりいはひそめてき

十八段

昔、おとこ、 しくをともせで、「るゝ心もなし。まいらむ」といへりければ、

玉かづらはふ木あまたになりぬれば えぬ心のうれしげもなし

十九段

むかし、女の、あだなるおとこの 見とてをきたる物どもを見て、

見こそ はあだなれこれなくは るゝ時もあらましものを

二十段

昔、おとこ、女のまだ世経ずとおぼえたるが、人の御もとに忍びても聞えてのち、ほど経て、

なる の とくせなんつれなき人の の 見む

二十一 段

むかし、おとこ、梅 より雨にぬれて、人のまかり出づるを見て、

の花を ふてふ も るめる人に着せてかへさん

し、

の花を ふてふ はいな思ひをつけよ乾してかへさん

二十二段

むかし、おとこ、 れることあやまれる人に、

山城の 手の玉水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

といひやれど、いらへもせず。

二十三段

むかし、おとこありけり。深草に住みける女を、やうやうあきがたにや思けん、かゝる歌をよみけり。

年を経て住みこし里を出でていなばいとゞ深草野とやなりなん

女、 し、

野とならば となりて鳴きをらんかりにだにやは は来ざらむ

とよめりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりけり。

二十四段

むかし、おとこ、 いかなりける を思ひけるおりにかよめる。

思ふこといはでぞたゞにやみぬべき我とひとしき人しなければ

二十五段

むかし、おとこ、 わづらひて、心地 ぬべくおぼえければ、

つゐにゆく道とはかねて聞きしかどきのふ 日とは思はざりしを